

読書に対する思い

情報工学科 國井洋臣

小学校の高学年の頃、教室の本棚に有名な偉人の伝記物の本が多数あり、仲の良かった友人の一人は、一冊残らず比較的短期間で読んでしまっていた。今でも読書の話になると劣等感からかその友人の顔が浮かびます。中学生の時の国語のテストの成績は数学や理科に比べて芳しくなく、どう感じたかを問う問題などでは解答に疑問を持つことも多々あった。中学を卒業して、哲学書や文学作品などにチャレンジしたこともあったが、難解で挫折したり、納得しないまま読み終えたりで、読書に熱中し、充実感を味わえた記憶はわずかしかなかった。

会社に入り、仕事で壁にぶつかったり、難問の解決を迫られたりとき、頼りにしたのは、まず信頼の置ける友達や先輩で、次に会社経営者の人生哲学や上司／部下との関わり方などのHOW TO物の本でした。視野が広がり、取り組み方・気持ちの持ち方も変わり、自分の成長のためにも先人達の知恵や考え方が大変役に立ちました。

会社内での連絡文書・報告書やエンジニアの技術文書などは文学的な表現がタブーな世界で、簡潔で誤解を招かない正確さが要求されます。しかしながら、地位が高くなり教養や見識が問われる立場になると、講演／寄稿や挨拶などの機会が増え、内容にまず興味を持って貰えるか、次に相手の心を動かし、印象深く残るかどうかが問われる。となると表現力の差が歴然と現れます。この差は少年期にたくさんの優れた本を読んだか、読んでいないかの差がかなりあると思っています。

人生経験を積んでくると、昔、難解でまったく興味を持てなかった内容の本も、これまでの様々な経験や視野が広がったことが読解力の弱さを補ってくれ、多少なりとも楽しく読めると感じています。

しかしながら、文書を書くとなると、表現の美しさや深さとか、心地よさとか、情緒的とか、心に響き感情を揺るがすとか、感動を与えることができるとかを考えると、使用する適切な言葉とその並べ方の組み合わせは無限と思われるほど奥が深い。ある気持ちを伝えようと文章を書き始め、何度も見直し、再考しても、常に物足りなさが残る欲求不満のまま原稿の締め切り期限を迎えてしまう。同じことを表現しようとしても表現力のある人の文章には力があり、光り輝くように生き生きとしてくる。上には上がある。今回もこれまでと同様に、達成感を味わえないまま、時間切れを迎えてしまった。まさに、心もとない、もどかしい人生とも似ています。